

2018年 4月 2日(月)

午後 1時30分 開始

【秘書広報課長補佐】 それでは、皆様、お待たせいたしました。

市長定例記者会見を始めます前に、このたびの人事異動に伴いまして秘書広報課が新たな体制となりましたので、ご挨拶をさせていただきます。

【事務局】 (挨拶)

【秘書広報課長補佐】 それでは、ただいまより平成30年 4月市長定例記者会見を始めさせていただきます。

最初にお知らせを申し上げます。記者クラブの方に異動がございまして、本日初めてこの会見に参加されます記者の方をご紹介申し上げます。

【記者】 (挨拶)

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。本日の会見の進行につきましては、お手元の次第のとおり、最初に市長の挨拶、その後、事業発表を行います。質問につきましては、事業発表についてからお願いいたしたいと思っております。事業発表に係る質疑応答が終了しましたら、次第の3番目、フリーの質疑応答へと進行したいと思っております。

なお、ご質問の際は、お手数でございますが、ご自席のマイクのスイッチを入れていただき、ご質問の後はお切りいただきますよう、よろしくお願いたします。

終了は14時30分を予定しております。ご協力のほどお願い申し上げます。

それでは、市長、よろしくお願いたします。

【市長】 では、4月の定例記者会見ということで、皆さん、よろしくお願いたします。

今ほどご紹介しましたけれども、秘書広報課、変わりましたので、またどうぞよろしくお願い申し上げます。そしてまた各部長も異動で変わっておりますので、この新しい体制で頑張らせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年には国体がありますし、平成34年度ということで、いよいよ5年ではなくて4年と言わなくてはいけなくなりましたが、北陸新幹線敦賀開業もございまして、それに向けて、今、敦賀市は正念場だと思っておりますので精いっぱい頑張らせていただきます。どうぞ皆様、よろしくお願い申し上げます。

【秘書広報課長補佐】 続きまして、事業発表をお願いいたします。

【市長】 事業発表は、発表項目2つございます。一つはダイヤモンド・プリンセス寄港に係る受け入れ体制についてということと、もう一つは平成30年度敦賀市職員採用候補者試験(医療職)の実施についてということでございます。

1つ目のダイヤモンド・プリンセス寄港に係る受け入れ体制についてでありますけれども、外国の大型クルーズ客船ダイヤモンド・プリンセスが敦賀港へ4月17日火曜日に寄港します。寄港当日は、鞠山北B・C岸壁、金崎宮、金ヶ崎緑地、氣比神宮、みなとつるが山車会館、JR敦賀駅に設置されます観光案内テントにて、市職員、敦賀港クルーズボランティア等が中心となり、乗船客に向けた観光案内を実施いたします。

また、寄港に合わせた各種おもてなしイベントといたしましては、敦賀観光協会主催によります金崎宮で開催されている花換まつりについて、例年15日までの開催のところを、寄港に合わせた17日についても特別に開催いたします。花換神事を初め、書道、甲冑の着つけ体験、物販・飲食ブース出店により乗船客を歓迎いたします。

2つ目に、神楽町1丁目商店街では、けひさんアートマルシェが実行委員会主催により開催されます。クラフト木工、布雑貨など手づくりの作品が並ぶクラフトストアでのお買い物、ものづくり体験ができるワークショップ、おいしい軽食とドリンクを楽しんでいただけの企画となっています。

それから3番目としまして、乗船客シャトルバスが発着します氣比神宮境内では、雅楽の演舞や抹茶の振る舞い、婚礼を控えたお二人の和装による写真撮影などが実施されます。

そのほか、敦賀市立博物館において開催されています人道の港敦賀ムゼウム10周年企画展等をごらんいただき、乗船客に敦賀の魅力を感じ取っていただきたいというふうに考えています。

なお、岸壁では、ダンスや吹奏楽の演奏等歓迎のアトラクション、箸研ぎ体験、化石発掘体験、特産品を販売する物産ブース開設等を福井県、敦賀市主催により実施しますし、それによって岸壁のにぎわいを演出します。また、乗船客には岸壁で、今回は桜の小枝を配布しまして、花換まつり会場での花換神事を体験していただくとしております。

それから、クルーズ船見学者向けには、きらめきみなと館の敦賀フェリーターミナルで一般見学者用の駐車場を設置いたします。きらめきみなと館からは鞠山北B・C岸壁行きの無料往復シャトルバスを運行しますし、福井県主催の船内見学会があったんですけれども、これは現在、募集を締め切っているということでございます。

なお、計7台運行しますシャトルバスの1台については、県内初運行となります燃料電池バス（FCバス）を採用しまして、市民の皆さんに乗車を体験していただくとしております。また、敦賀フェリーターミナル駐車場からは徒歩での入場が可能ということでございます。

以上、敦賀港のにぎわい創出と市内経済の活性化につながるよう、万全の体制で準備を整えてお待ちしておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

あと、2つ目といたしましては、平成30年度敦賀市職員採用候補者試験（医療職）の実施についてでございます。

平成30年度敦賀市職員採用候補者試験（医療職）を別紙のとおり配付いたします。

今回募集する職種は、薬剤師、臨床工学技士、管理栄養士及び看護師、それぞれの採用予定人数は配付資料のとおりです。

受付期間は4月6日の金曜日から4月20日の金曜日まで、第1次試験は5月6日日曜日、市立敦賀病院で行います。2次試験につきましては5月下旬、最終合格発表は6月上旬を予定しております。よろしく願いいたします。

発表項目は以上です。

【秘書広報課長補佐】 それでは、ただいま発表いたしました項目についてご質問をお受けしたいと思っております。

最初に、幹事社さんからお願いいたします。

【記者】 よろしく申し上げます。

ダイヤモンド・プリンセスについてなんですけれども、まずこれ、来る人数ですとかこちら側の受け入れのボランティアの体制ですとか、そういったものは過去と比べてどうかというのをちょっと教えていただきたい。

【市長】 部長のほうからお答えします。

【産業経済部長】 それでは、産業経済部です。また1年間、引き続きよろしく願い

たします。

それではまず、乗船客の数でございますけれども、乗船定員が2,706名の船でございます、ほぼほぼ満席の状態ということだけお聞きしております。

それと、ボランティア等、そういった数の体制でございますけれども、当然市職員、県の職員さん、そして敦賀港クルーズボランティア、そして観光ボランティアガイドつるが、また県立敦賀高等学校の商業科の生徒さんにもお手伝いをさせていただくというような形で、前は土曜日だったんですけども今回は平日ということで、今そういったところで体制を整えているという状況でございます。

【記者】 若干少なくなるということでもいいんですかね、今のは。

【産業経済部長】 そうですね。土曜日と平日の違いがございますので、多分同数で、頑張っている声かけをしているという状況でございます。

【記者】 もう1点なんですけれども、市長に伺いたいんですが、燃料電池のバスを県内で初めて走らせるということで、ハーモニアスポーツ構想の一環でも水素を押し出しておられますが、期待というか、このことによる期待を改めて市長のほうから伺いたいのですが。

【市長】 敦賀のほうでは水素社会の形成ということで取り組んでいるんですけども、とりあえず今は敦賀市には何にもないんですね。それらの水素に関する施設とかありませんので、このFCバスが来まして初めて、市民の皆さんにも、こうやって水素を使って走っているバスがあるんだなということを感じていただくと。実際に物が見られるわけですから、そこからまた一つ気持ちがステップアップするというふうに考えています。

【記者】 ダイヤモンド・プリンセスの関係で、大体今回の寄港でどれぐらいの経済効果を見込んでいるのか。それをお願いします。

それと、前回の、昨年の秋の2回でどれぐらいの効果があつたのか、改めて確認させていただきます。

【産業経済部長】 それでは、お答えさせていただきます。

まず、経済効果でございますけれども、前回、昨年9月2日に寄港したときの、これは福井県の試算という形になりますけれども、約4,100万円、そして10月14日の土曜日も、こちらのほうも約4,500万円。今回は、先ほども申しましたとおり、前は土曜日、土曜日だったんですけども、今回は火曜日という平日になりますので、できれば同額ぐらいの効果があればということで、今いろんな催し物を企画しているというところでございます。

以上です。

【秘書広報課長補佐】 それでは、各社伺います。発表項目につきまして質問がありましたら挙手のほうをお願いいたします。

【記者】 クルーズ船の関係で市長に1点と、部局にちょっともう1点お伺いしたいんですが。将来的には敦賀は母港化というふうなこともお考えなんですか、クルーズ船の。

【市長】 このダイヤモンド・プリンセスについては、そういう母港化ということはないと思います。ですから、来ていただけるチャンスをいかに増やしていくかということが今の目標ですので、継続して寄っていただければありがたいなというふうに思っています。

【記者】 クルーズ船、ダイヤモンド・プリンセスに限らず、何かしらの母港化ということとは考えておられますか、クルーズ客船の。

【市長】 それは非常に難しいハードルだと思いますので。

【記者】 函館みたいな感じで。

【市長】 今のところ、そういう予定はございません。

【記者】 それと、母港化をお考えでなければちょっと部局のほうにお伺いしてもあれかなと思ったんですけれども、先ほど経済効果の話があったんですが、仮に母港化した場合の経済効果というのは、これは本当に飛躍的に大きいんだと思うんですけれども、その場合は一度に万の単位の食材を用意せなあかんということになると思うので、その場合の試算とかはやっておられるんですか。仮に、市長は今ちょっとお考えがないということをおっしゃっていましたがけれども。

【産業経済部長】 そういった試算ははっきり出してはいないところなんですけれども、はっきり言いまして、そうやって来ていただいただけでもこういった額の経済効果があるということになれば、非常にまた大きな魅力はあるのかなとは思いますがけれども。

【記者】 この10倍、20倍とか、はかり知れないぐらいの。とにかく食材を使わなくてはいけないし、基本的には。でも、それはやっていない。

【産業経済部長】 そうですね。

【記者】 ということですか。わかりました。

【副市長】 副市長ですけれども。

母港化というのは、日本海側はなかなか難しいんですよ。どうしても冬場になりますと太平洋側から外国のほうに、日本の客船、代表的なものが3つございますけれども、その3つとも海外へ行ったり太平洋側を行ったりすることなんです。それで、できればそれは母港化ができればいいなと。一番敦賀の港に入ってきている船はぱしふいっくびいなすですけれども、そういったものも今は大阪港が母港になっているかと思います。全国的にもっとクルーズ船が増えてということになると考えるのかもしれませんが、今現在、敦賀市で敦賀港が母港になるというのは非常に難しいということで、現在、市と県とタイアップしまして、なるべくたくさん寄港していただくというようなことを目指している。今現在はそういうことを目指しているということでございます。

【記者】 大型船も種類がいろいろあるので、北海道でできてこの辺でできないということとはなかなかないのではないかなと思ったりもするんですけれどもね。

【秘書広報課長補佐】 次の方、よろしく願いいたします。

【記者】 関連なんですけど、母港化とはちょっとあれなんですけれども、たしか副市長、北陸新幹線が敦賀に来たときにはレール・アンド・クルーズとかいうことをおっしゃっていて、その発着点としてのクルーズの発着点となるようなという誘致みたいなものを目指するような動きというのはないんですかね。その発着点効果とか。

【副市長】 金沢がレール・アンド・クルーズということで、15年ほど前からですか、やってきまして、それで、ダイヤモンド・プリンセスほど大きくはないのですが、コスタクルーズが入ってきているということでございます。首都圏から来て金沢で1泊していただいて船に乗るとか、逆に金沢で下船して1泊して新幹線で東京へ帰っていただくと。こういったのは1泊する効果があるので非常に経済的にもいいのだろうなということで、今後、新幹線の開業に向けてそういったことも当然検討、それから取り組んでいかなければいけないなということで、議会ではそういう発言をさせていただいています。金沢を例に勉強させてもらいながら、そういったことにも取り組んでいきたいなということでございます。

【記者】 このダイヤモンド・プリンセス、これに限らずなんですけれども、敦賀の沖を通った場合に日本原電は少なくとも見えると思うんですよ。これについては景観上のことは何か市のほうで考えておることはありますか。何の問題もなく、あれなんですか。誰も意見は出ないんですか。そういう意見で。

【副市長】 問題の所在がわからないんですけれども。原子力発電所が見えるのは景観上まずいじゃないかということをおっしゃるのかもしれませんが、そういったことについては、クルーズのディレクターとかキャプテンとかそういったのが事前に調査に来ておりまして、それで問題なく、入りやすさとか、敦賀港の、全体、トータルを見た上で敦賀港に入港していただいているということで理解しておりますので、原子力発電所があるからというのは特に、誘致に関しましては問題にはなっておりませんし、景観上どうかと言われるとそんなに支障にはなっていないのかなと。おっしゃるように。

【記者】 何かそういうふうな意見は全く、そうしたら出ていない。

【市長】 全く聞いたことないです。

【副市長】 今、初めて聞きました。

【記者】 夜は原子力発電所の電気がついてきれいだと思うんですけれども、昼間は何か見ようによっては3・11の震災以降、原発への見方もちょっと変わっているでしょうし、こういうお金持ちが乗る船から見てどうなのかなというのを思ったんですけれども、全くその意見はない。

【市長】 そうですね。クルーズ客船の方が来られておっしゃっているのは、敦賀の港というのは両側に湾になっているので、すごくロケーションがいいと。ですから、景色がいいよということで非常に歓迎的なお話は聞いていますけれども、それ以外の話は伺ったことはないです。

【記者】 あれ相当でかく見えるはずなので。そうですか。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 前2回が土曜日で、今回が平日ということですがけれども、その観光の効果というか、たくさん来てもらうという意味で言うと、いろんなケースというのを想定しておもてなしというのをしていくことになると思うんです。土曜日、土曜日で、今回平日というのと、この先の予定というのは、何か今の時点であるんですかね。この土曜日、土曜日というパターンは、とりあえずこちらとしては受け入れてやったわけですね。今回、平日の部分というのをやって、多分、導入効果があって、どんなふうな、何というのかな、経済効果の比較みたいなこともきっとされるでしょうし、それはあると思うんですけれども、この先の予定というのは何か立っている部分というものはあるんでしょうか。

【市長】 この先の予定というのは、ダイヤモンド・プリンセスに限って言いますと予定は立っていないです。

この2回の寄港によってどういう評価を受けていますかということをお話ししましたら、ボランティアの方とかいろんな方が、外国人のお客様が降りてくるときにすごく積極的に話をしにいたり声をかけにいたりして、まち全体がウエルカムという印象をお客様が受けていると。ですから、それは敦賀のポテンシャルですばらしいですねということと、非常に評価も高いという話をいただいております。日本の代理店にしてみれば、敦賀港はぜひまた続けて寄りたいなというイメージをいただいているというふうに直接聞いているんですけれども。じゃ、敦賀というまちがそれだけ観光地なのかというと、

余りそれだけネームバリューがありませんので、それをどうやって今から広めていくかというのが今後の課題というふうに思っています。

その中で土曜日に2回来ていただいて、今度は平日の火曜日ですので、ボランティアの方も来られる人と来られない人いますし、当然市内のにぎわいというのが、最初のときは9月2日のお祭りで非常ににぎわいがありましたし、次の日は10月14日の鉄道の日でしたので、そのときもにぎわいはつくれましたけれども、今回どれだけにぎわいをつくれるかということが3番目の評価になってきますので、何とかいい評価をもらいたいというふうに思っています。

ただ、桜の花が、たくさん雪が降ったのでちょうどいいタイミングになるかなと思ったから、先に咲きましたので、いつもでしたらリンゴのタオルをお渡しするんですけども、今回は花換まつりの桜の小枝と。春先の観光客の皆様は桜の花を見にくるのがメインだとおっしゃっていますので、できるだけその印象深いイメージを残したいなということで取り組んでいるというところです。

あとは部長から何かありましたら答弁します。

【産業経済部長】 済みません。市長が全てお話ししたとおりでございます。

ただ、やっぱり平日というところなので、今やっぱり商店街とか、あとは氣比神宮の境内の中でもいろいろイベント等を考えておりますので、そういったところにいい印象を持っていただければというふうに思っております。

【記者】 ダイヤモンド・プリンセスの寄港に関してなんですけれども、先ほどもお話ありましたけれども、今回、平日ということで、ボランティアの方々、今回もお願いしていらっしゃると思うんですけれども、平日というお仕事との兼ね合いで少し減るかもなというような思いを持ってらっしゃるのかなと思うんですけれども、乗船客の数はこれまでと同じようにほぼ満席ということで、どれぐらいのボランティアの方がいらっしゃったら足りるなというような想定をしてらっしゃって、実際その数というのは達成できそうな感じはしてらっしゃるんですかね、見通しとして。

【市長】 今、調べるみたいですので。

ただ、土日だと一般の方がたくさん見えるんですね。ですから、ダイヤモンド・プリンセスから2,700人の乗船客の方たちが降りてこられるわけなんですけれども、1回目でしたら6,000人ぐらい見にこられた方もいらっしゃったので、そういうほかから来ていただく人たちというのがやっぱりにぎわいになってきますので、まちの中に人があふれ返っているほうが多分お客さんも喜んでいただけるというふうに思っています。

ボランティアの人数は、済みません。後で答えます。

【産業経済部長】 じゃ、今資料が来ましたのでお答えします。

そうですね。クルーズボランティアの部分につきましては、前回の9月、10月を見ますと、やはり60名ぐらいが必要かなと。観光ボランティアガイドさんについては10名程度、そして敦賀高校の商業科のスタッフの方とか、あと敦賀市とか、あと福井県さんの職員さんというところで大体60から80というところで、スタッフを鋭意募集をかけて努力しているというところでございます。

以上です。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

それでは、次第の3番目、フリーの質疑応答へと行きたいと思います。これにつきまして

でも幹事社さんのほうからよろしくお願ひいたします。

【記者】 最初に、市長にお伺ひします。

敦賀市内にも原子力発電所を持っている日本原子力発電が先日、茨城県の東海村にある東海第二原発について、立地の東海村だけじゃなくて、その周辺の5市も含めて同じような権限を持つ安全協定を結びました。この立地以外にも、その周辺にも同じような権限を持つ安全協定を広げてほしいというのは、県内の原発をめぐっても京都や滋賀県などがこれまでも求めていたことなんですけれども、その安全協定の範囲の拡大について、市長は賛成なのか反対なのか、その理由も含めてお願ひします。

【市長】 安全協定については、それぞれの地域の状況や考え方のもとで自治体と事業者が協定を締結しているものですので、今回のこの東海第二発電所の安全協定については私どもがコメントする立場にはないというふうに考えています。

県内でも周辺自治体についておのおの協議を、隣接協定の締結をしているところもありますし、その内容についてはそれぞれの事業者と自治体が協議をして定めているというふうに考えています。ですから、私個人的にどうかと言われますと、やっぱりケース・バイ・ケースなんだろうなということを考えますけれども、それぞれ事業者さんと自治体と考えて結んでいただく、また内容についても協議していただくべきだというふうに思っています。

【記者】 同じことについて、恐らく西川知事は、これまでの発言などを私なりに解釈している分では、余り立地以外に広げることについては、そもそも経緯が違ふし歴史も違ふので、どちらかと言えば否定的なお考えなのかなと思っているんですけれども、敦賀市長としては、例えば原電と結んでいる安全協定あるいはもんじゅと結んでいる廃炉協定などについて、同じような内容で周辺の自治体も個別に協議して、市としても広げることには別にやぶさかでないのか、それとも立地はやっぱり特別なので余り広げることには考えていないのか。それはどうなんでしょうか。

【市長】 その広げていくかどうかというのは事業者の判断だというふうに考えているんですけれども。ですから、私の立場からそれを結びなさいよとか結んだらだめですよということを言うべきではないのかなと思っています。

ただ、知事がおっしゃるような歴史的背景があるんだということもよくわかるんです。ですから、原子力を誘致したときの話というのがありますので、必ずしもそれがお金が入ってくるということに限らずに誘致しているわけですよ。ですから、国策に協力して何とか頼まれたからお手伝いしましょうというところからスタートしている。その気持ちというのがその周辺自治体の方にあるのかどうかというのは、やっぱりそこはないんじゃないかなという気持ちがあります。ですから、その歴史的な意味というのはよくわかりますし、わかりますけれども、私がそこで指図するものではないというふうに考えています。

【記者】 ありがとうございます。

【記者】 市長も先ほどの挨拶の中でおっしゃっておられましたが、新幹線が5年と言えなくなると。今の敦賀市政で、市内のまちづくりとかも見て、受け入れをする上で喫緊の課題というのは何なんでしょうか。

【市長】 いっぱいあるんですよ。いっぱいありますので、4年後に迫りましたから、駅舎の形というのが、デザインが一つ決まりましたけれども、この内装というのとかかわってきますし、その駅西側、駅東側の出入りの仕方、それから道路へのアプローチの仕方と

いうのも一つ検討していかななくてはいけないですし、詰めていかななくてはいけないことだと思います。

もう一つは、景観刷新モデル地区の中でやっておりますけれども、敦賀市の魅力づくり、観光とかそういう魅力づくりということを早目に発信していかななくてはいけないというふうに思っていて、そのことを今やっています。その中では、やはり杉原千畝さんの人道の港ということを発信しながら、それにプラスして歴史的なものを乗せていけばいいのじゃないかなということを考えています。それをやる上で、要は、市内をぐるっと周遊していただくのにバスがありましたけれども、バスをぐるっと回るところから8の字に変えたりとかということをして、ちょっと早目にやってその辺の評価もして改良を加えていたらなということをやっています。

それから、この間、議会でも言いましたけれども、国体がありますので、国体のプレ大会でもその会場でいろんな物を売っていただいて、商品を、物を売るということで儲けられるなという人たちをつくって、その人たちが商売に、店売りに変わっていったらいいなというような人の活性化もしていかななくてはいけないと。ですから、氣比神宮の前の門前のところで商店街が何かやりましょうという気持ちになってくれましたから、そういうことも含めてやっていかななくてはいけないということで、いろんなものを総合的に進めていこうとしています。その中で一番目玉になりますのは、ムゼウムのところの金ヶ崎周辺の整備ということは何とか間に合わせていきたいというふうに考えています。

何かたくさん言いまして取りとめがなかったですけれども、済みません。

【秘書広報課長補佐】 それでは、各社伺います。ご質問がありましたら挙手をお願いいたします。

【記者】 ちょっと何問かあるんですけども、全て原子力関係で申しわけないんですけども。

まず、先日もちょっとお聞きしたかと思うんですけども、先日、もんじゅの廃炉の廃止措置計画が認可されて、昨日から廃止措置実証部門、実証本部という組織が立ち上がりましたけれども、改めて新しい年度を迎えて、実際に本格的にもんじゅの廃炉が進むことについての、まず市長の受けとめをお聞かせいただけたらと思います。

【市長】 もんじゅの廃止措置につきましては、やっぱり地元としますと安全を第一にというのが大前提でございます。安全を第一に進めていただきたいということがありますし、そのために工程があるのでやっしまおうというのではなくて、きちんと安全な体制をとっていただいてから進めていただきたいというふうに考えています。

【記者】 本格的には7月からというふうな工程も示されているので、私たちとしても無事にやってほしいという思いがあるんですけども。

一方で、原子力機構はご存じのとおり、動燃、サイクル機構、原子力機構というふうには、いわゆる名前を変えながら、組織を変えながらここまでやってきて、それでもいろいろなトラブルを起こしてきたという歴史があって。今回、JAEAの名前自体は変わっていませんけれども、廃止措置実証部門という形で新しいメーカーも入れてということになっていますけれども、やはりどうしても組織を変えただけで根本的なものは変わっていないんじゃないかというような不信感を持っている人たちも実際にいると思うんですけども。その点に関して、市長として、新しい部門が発足したことも踏まえまして、その辺、原子力機構に何か注文というか、こういうところ気をつけてほしいというような思いがあれば

お聞かせいただければと思います。

【市長】 ヒューマンエラーや事前の検討不足によるトラブルが度重なっていることは大変遺憾であり、エラーやトラブルを未然に防ぐことのできる組織体質に改善していただくよう、強く原子力機構や文科省に申し上げているところであります。

このようなエラーやトラブルが続くようでは、廃止措置を任せても大丈夫なのかという疑念や不安は払拭できないということはよくわかります。文部科学省の指導、監督のもとで真摯に取り組み、結果で示していただきたいというふうに思っています。

やはり4月1日からの組織改定ということがありますけれども、その改定に期待するところは非常に大きいです。ですから、今までの延長で組織を改正したからうまくいくというふうに思っていられちゃったら、それは困るので、きちんとやっぱり真摯に取り組んでヒューマンエラーが起きないように、また組織エラーが起きないように取り組んでいただきたいというふうに思っています。

【記者】 あと1問だけなんですけれども、先ほど他の方が質問をした件とほぼ同じなんですけど、原電が5つの市と村でその事前了解というところを結びましたけれども、どうしても原電が結んだということで、この地元、先ほど市長は事業者とそれぞれの人、まちとの相談の上でということだというふうにおっしゃいましたけれども、周辺の自治体から見ると、同じ原電がやっているのに、例えば、敦賀は事前了解がなくて東海第二は事前了解があつて不公平じゃないかという声も恐らく出てくるのが予想されるんですけれども、そうなったときに市長としてどういうお立場、ほかの市町のことは口出しする権利はないとおっしゃっているのも踏まえた上でなんですけれども、立地の長としてどういうふうな立場でこの議論をリードしていくのか。高浜、大飯とかは既に同意が済んでしまっているので、恐らく美浜と敦賀がこういう議論の対象になってくるのが予想されるんですけれども、全原協の会長という立場でもいらっしゃるんで、やはりそういうことを、多分見解を求められることも多くなると思うんですけれども、どのような立場で今後のこういう、事前了解という、その同意のあり方というようなことに関して議論を率いていきたいかという、ちょっと難しいかもしれないんですけれども、ちょっとぼんやりした質問なんですけれども、お聞かせいただければと思います。

【市長】 敦賀市長としても全原協の会長としてもなんですけれども、全原協の会長として、役員さんのところをずっと回ったりして立地に対する考え方なんかいろいろ意見交換もしたんですけれども、やはりそれぞれの立地によって条件はそれぞれ違いますので考え方も当然違いますし。その中でどういうふうにされていくかというのは、やはり各隣接自治体と事業者との話し合いの中で決められるべきなんだろうと思っていますし、提供する内容につきましても、同じようなものをやるのか一部簡略化してやるのかという内容の違いというのもやっぱり出てくると思いますので、その辺はそれぞれにやられるべきだというふうに思っています。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 ちょっと話は変わりますけれども、博物館長が退職されて今は不在だと思うんですけれども、館長職はこれからどうするんですか。また新しい人を誰か引っ張ってくるのか、そのあたりはどうでしょうか。

【市長】 そうですね。教育長に任せたほうがいいのかもしれませんが、外岡館長が退任されたということは非常に敦賀にとっては惜しいと思っているんですけれども、や

はり素晴らしい先生でして、次のステップに行きたいということであれば、次の、敦賀の研究をステップにしていられるのがいいというふうに私は思っています。じゃ、敦賀市としてそこが空白でいいのかということではなくて、何とかしなくてはいけないというふうに思っているんですが、今はその手当てができていない状態だというふうに思っています。

あと、教育委員会のほうでどんなお考えかは言っていたらかなと思います。

【教育長】 ご指摘の博物館のことなんですけれども、館長の解任に伴いまして人選を試みたんですが、急には見つからないということでございましたので、しばらくちょっとお時間をいただいて早急にまた人選をしてまいりたいと思っています。当面、文化振興課長が博物館の館長を兼ねるというふうになっておりますので、今はそういう状況でございます。

【記者】 具体的に、例えばこういう人にとかそういうのはあるんですか。

【教育長】 ちょっと今はお答えを控えさせていただきます。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 これはちょっと教育委員会に聞いても、市長、大丈夫なんですよ、これ。この場合は別に教育委員会に聞いても大丈夫なんですよ。

【市長】 大丈夫ですよ。

【記者】 うちの新聞で松原小学校の、教育被害と申したらいいのかわかりませんが、ちょっと続けて書いているんですけれども、担任の教諭というのは現在どういう扱いになっているのか、ちょっと教えていただければなと思います。

【教育長】 異動のことにつきましては、県の方の異動になったというふうになっております。県の施設への異動ということで私どもは聞いております。

【記者】 県の施設。

【教育長】 はい。

【記者】 新聞見えていますと何か新しい先生が来られているんですけれども、松原小学校に。

【教育長】 新しい教諭は何人もおります。松原小学校の方に転任しております。

【記者】 もとのその教諭は、そしたら松原小学校には籍はあるけれども県の施設に行ったということですか。

【教育長】 左様でございます。

【記者】 その県の施設というのはどこになる。

【教育長】 異動は県教委でございますので、県教委に聞いていただければと思います。

【記者】 県の教育委員会に聞けど。教育長はわかっているけれども、ここでは言いませんよという話ですか。

【教育長】 そもそも学校の先生の……。

【記者】 いや、そういう意地悪なことをね。

【教育長】 いやいや、そうじゃなくて。

【記者】 知っていながら知らんぷりをするということではなくて、知らないからお答えできないのか、知っていても答えられないのか。

【教育長】 そもそも学校の先生方の異動というのは県費負担教職員でございます……。

【記者】 うん。人事権はね。

【教育長】 異動は県教委が行うものでございますので、県教委の方に聞いていただければありがたいと思います。

【記者】 うん。だからそれは、僕が申し上げているのは、教育長は知っているんだけど、あえてそのように僕に言っていたらいいんですか。

【教育長】 そういうことです。

【市長】 それは記者会見の質問の内容とちょっと離れてきますよね。だからそれはちょっと控えていただきたいです。

【記者】 まあ、そういうふうな感じがしましたけれども。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 新幹線のことでは今度は市長にお伺いしたいんですけども、冒頭の挨拶にありましたけれども大体あと5年ぐらいで、今の準備状況として、計画どおりには進んでいるということなのか、計画より実際の進捗はちょっと遅れぎみなのか、それとも前倒しペースで進んでいるのか、今の認識をお伺いしたいのと。

その受け皿を準備しても、それを各県外、市外に発信して周知していくのも一定の時間がかかると思うんですけども、その辺含めて今の準備状況についての市長ご自身の評価をお伺いします。

【市長】 新幹線の工事の進捗状況ではなくて敦賀市の準備状況の方ですね。

敦賀市の準備状況としますと、敦賀に観光として魅力のあるところがあって、それを目的に来ていただきたいなということをおっしゃっているんです。その上で、では何を目玉にしていこうかというときに、先ほども言いましたけれども、人道の港、優しい日本人がいた場所というのをテーマにして出しています。それを伊勢志摩サミットですずっとアピールしておりますので、大体観光地として定着するのに10年ぐらいかかるんでないかなという思いがありますが、その中では着実にというか順調にアピールしながら準備をしている状況ではないかなと思っています。

ただ、人道の港だけでは私らはやっぱり不安がありますので、その中で北前船とか松尾芭蕉とか大谷吉継公とか、そういうところをまた優しい日本人の上に上乘せしてというんですかね、それで発信できればいいなと思って準備、発信しておりますので、その部分の周知というのはちょっと間に合わないかもしれませんけれども、一応敦賀の観光としてのイメージとすると順調にいつているんだろうなというふうに思っています。

部長は違うと言うかもしれませんが。

【記者】 部長の評価もお願いします。

【産業経済部長】 私も順調に進んでいると思っておりますし、特にムゼウムの来館者数が飛躍的に伸びているところが、非常にこれから拡張するに当たり、これからどういうふうにするかというところでまた意欲的にやれるかなと思っていますのでございます。

【秘書広報課長補佐】 よろしいでしょうか。

【記者】 ちょっと聞き忘れたことがあったんですけども。あと、原子力のことと、あとムゼウムのこと1個ずつなんですけれども。

市長は先日、経産省とか自民党にエネ基の関係で新增設、リプレースの件で要望されにいかれたと思いますけれども、そのときの手応えと、あと一方で、先日、経産省が2050年のエネルギーの構成に関して再エネを主力電源というふうにして、原子力に関しては

特段変化が見られないような報告書を今のところまとめているんですけれども、まだ最終的にエネ基が確定するのはまだまだ夏までということですが、この残りわずかな時間でありまして、その新增設、リプレースに向けて、市としてどういうアクションをとっていききたいかというお考えがあればお聞かせいただければと思います。

【市長】 一つは、先日、3月29日、議長とともに行った件ですが、経済産業西銘副大臣からは、2050年を踏まえた上で2030年の比率をどう実現していくかという大きな課題に直面していると、リプレースや建設についてこの場でお答えできないが地元の気持ちは理解できるので、大臣にもしっかり伝え、できるだけ方向性が見えてきたらいいというふうに思っているというようなお話をいただきました。ただ、明確なお答えというわけではないので、私どもの立地の気持ちはわかったよというようなところが伝わったのかなということはあると思います。じゃ、今後どういうふうにそれが反映されるかということについては、ちょっと今は私には答える材料がないというのが答えです。

【記者】 どうなるかはわからないけれども、これから二の矢、三の矢というような形で考えているということなのか、それとも議論の状況を見守っていくというようなことなのかというのはいかがでしょうか。

【市長】 私としましては、このエネ基の議論が始まった昨年の8月から何度も国のほうにも行っておりますし、要望はしております。気持ちも伝えていきますので、その中でどういうふうに判断されるかというのは国がやられるでしょうし、これからも当然機会があれば事あるごとにお話はさせていただきますけれども、それと、それが実現できるかどうかというのはまた別物かなというふうに思っています。

【記者】 あともう一間。全然話が変わるんですけれども、ちょっとムゼウムの話がさっきから出ているのであれなんですけれども、この間、3月29日にムゼウムが開館10年ということで、先ほど部長もおっしゃっていましたが、来館者数も飛躍的に伸びてということで、これから北陸新幹線開業に向けてもかなり重要な施設になってくると思いますけれども、今後、この人道の港という敦賀にしかない、ある意味すごい強みであると思うんですけれども、この強みをどういうふうにこのムゼウムを通して今後も発信していくかというような思いとか今後の展望があれば、市長、お聞かせいただければと思います。

【市長】 具体的な施設については部長がお答えすると思いますけれども。

現状のムゼウムが手狭になってきてまして、これ以上、多分お客様が来られてもさばけないだろうと、回転が追いつかないだろうとということまで感じていますので、そういう意味では新しい施設できちんとした集客、また団体のお客様を迎えることができるような施設になれば、これはよくなっていくだろうと思っています。

もう一つは、ユダヤ難民とポーランド孤児がありますので、ポーランド孤児につきましても少し資料を収集しましてきちんと顕彰できるような中にしていきたいと思っています。2020年のオリンピックの年がちょうどポーランド孤児100周年になりますので、そこまでに掘り起こしができなかつたら、きっと歴史の中に埋もれてしまうんじゃないかという危惧も思っていますし、ポーランドの方もそういうふうに思っていると思うので、それまでに何とか形にしていけたらなど。

そういうことを含めていろんな、日本の外交とか中国とか韓国なんかでもいろいろ言われますけれども、戦時中にあっても日本の国は優しかったんだということが、その優しい日本人がいた場所と敦賀市が言っているのを発信源にして、日本の国の人情味というか優

しさというのを発信できるような場になっていったらいいなというふうに狙ってやっているつもりです。

あと、部長が言います。

【産業経済部長】 施設の部分につきましては、金ヶ崎施設整備の委員会の中で、ムゼウムの拡充の部分につきましてはおおむね形ができたかなど。現在の面積の3.8倍ぐらいの面積になりますけれども、大きくなってもやはり空間をどうするか。市長が申しましたとおり、団体客とかそういった受け入れが非常に厳しい中で、そういったところの受け入れをその周辺の施設で補えるような形で、金ヶ崎周辺一帯でムゼウムもありますし赤レンガ倉庫もあるし鉄道資料館もという形で回遊ができて、ひいては市内へいざなえるような動線ができればというところで、そういった計画を今現在練っているところでございます。

以上です。

【秘書広報課長補佐】 次の方、よろしくお願いします。

【記者】 先月あったJ-ALERTの防災ラジオが鳴らなかったという話なんですけれども、あれは私が当時聞いたときは、たしか接触不良だったと、つなぎ直したら復旧はしたけれども詳細な原因がわかっていないという話だったと思うんですが、結局、具体的にどの部分がピンポイントで悪いのかということまでは突き詰められていないという話だったと思うんですが、それはその後どうなりましたか。

【市民生活部長】 市民生活部でございます。

原因でございますが、ラジオへの接続のプラグと申しますか、その接続がうまくいっていなかったというのが原因ということでございます。

【記者】 物自体が壊れていたわけではないということですか。

【市民生活部長】 そうです。接続の問題でした。

【記者】 市長に、ちょっと耳が痛いかもわからないんですが、この前にも県の訓練でもあって、それぞれ原因は違うと思うんですけれども、ミスが続いて、背景に何か組織のちよっと緩みみたいな、そういうものがあるのかと、そのあたりはお考え。

【市長】 そうですね。一度目、J-ALERTが誤作動しましたので、やっぱり2回目にやるときには万全の体制をとるべきだというふうに思いますが、職員とかに聞いてみますと、日常の状態じゃないとだめなんじゃないかなみたいな勘違いもあったみたいで、事前にきちんとチェックするとか動作確認するとか、そういうところではなくて、いつもの日常を示すべきだというふうに考えてしまったのではないかというふうに思っています。

その事象があった後、今はしばらくは月に1回ということをお話ししていますけれども、しばらくは毎日2人ずつ、そういう接続なんかの確認ができるようなノウハウをつけようということでさせていただいておりますけれども、次は絶対にないように、また「前の日ぐらいチェックしたらどう」という話もさせていただきながら、次はきちんとできるようにさせていただきます。

【記者】 ありがとうございます。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 ちょっと市長、もとへ戻って恐縮なんですけれども、クルーズ船の母港化の、先ほど僕が質問させてもらった部分ですけれども、今現在、母港化は考えていないというふうなことでしたが、これは考える余地が、検討したけれどもないというふうに理解したらいいですか。

【市長】 いえ、検討もしていません。考えておりません。

【記者】 検討もしていないという。ということは、何かしらの拍子で、ほかの港との競合のことで、敦賀ももしかしたら手を挙げていくということもあるんでしょうか。

【市長】 考えたことがないのでなかなか答えにくいんですけども。

例えばダイヤモンド・プリンセスですと、東京に行ってお客様が海外から見えて、横浜港から乗るんですよね。日本一周して横浜港に戻るというルートをつくられていますので、それだけの何千人という人たちがさばけるというシステムができていると思うんです。ですから、敦賀港の規模としてどのくらいの船だったらさばけるのか、さばけないのかということも検討しなくてははいけませんし、ご存じのように、ダイヤモンド・プリンセスがとまりますのは、火力発電所の材料置き場のところをあけていただいとまりますので、そういう意味では港としての受け入れ体制もまだできておりませんので、延伸ということで岸壁の延伸工事も始まったところですので。ですから、敦賀港のステップアップをしていかななくてははいけませんし、まちとしてのステップアップもしていかななくてははいけませんから、まだそこまで検討するようなものではないというふうに思っています。まだそこまで考える前にいろいろすることがあるのではないかなと。

【記者】 それは市長は否定的だということでは全くなくて、今はそういった段階にはまだないだろうという、そういうことでいいですか。

【市長】 ですから何も考えてないです。否定も肯定も何も考えておりません。

【記者】 市長、単純に考えても、何か非常に物がやっぱり集まる場所にあるので、母港化すると。食事だけでも膨大な量、集積地になっていくと思うので、これはちょっと、私が言うのもおかしいですけども、全く考えていないということだと、何かちょっと市民のほうからぐっとこないですか。そうでもないですか。

【市長】 だからプラスもマイナスも、今はその段階にないということですよ。検討する段階にないと。もっとほかのことを高めていかないと。

【記者】 はい。

【秘書広報課長補佐】 それでは、ほかにかがでしょうか。

それでは、これもちまして4月の市長定例記者会見を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

午後2時26分 終了